

トーマス・マンとニーチェ
 —『ファウストゥス博士』の場合—
 後 藤 健 次

Thomas Mann und Nietzsche
 — im Fall „Doktor Faustus“ —

Kenji GOTO

Zusammenfassung

Wenn wir den letzten Roman Thomas Manns, Doktor Faustus, gelesen haben, tauchen sogleich vier Gestalten in unserem Bewußtsein auf: der Held des Romans Adrian Leverkühn, sein Freund und der Erzähler Serenus Zeitblom, der Autor Thomas Mann selbst und der Philosoph Friedrich Nietzsche. Diese Gestalten verflechten sich unauflösbar ineinander, so daß wir sie als eine Ganzheit, d.h. *einen* wirklich lebenden Mann vorstellen können. Unter den Beziehungen dieser vier Menschen ist die zwischen Adrian Leverkühn und Nietzsche uns besonders wichtig und interessant. Aber Nietzsches Name erscheint niemals im Roman, „eben weil der euphorische Musiker an seine Stelle gesetzt ist, so daß es ihn nicht mehr geben darf“.⁽⁵⁾

A. Leverkühn und Nietzsche besitzen die gleichen Erfahrungen gemeinsam: beide studieren zuerst Theologie, sie leben als Studenten in Leipzig, sie machen gleiche Bordell-Erfahrung, sie haben den gleichen Todestag und Todesalter: am 25. August, 55 Jahre alt usw. Auch der Heiratsantrag durch den Violinist Schwerdtfeger erinnert sofort denjenigen durch Paul Lee. Auch Paul Lee liebt Lou Salomé, wie Schwerdtfeger Marie Godeau, aber unter dem großen Unterschied, daß dem Violinisten sein eigener Antrag gelungen ist und darauf das tragische Ende folgt, daß Ines Institoris aus Neid den Violinisten erschießt. Dies tragische Ergebnis zeigt die vortreffliche Romanteknik Thomas Manns, die eine Anekdote im Nietzsches Leben zu einer schicksalhaften, schrecklichen Geschichte magisch entwickeln konnte.

In diesem Sinne ist die Inspiration, die Adrian vom Teufel gegeben wird, von derjenigen Nietzsches, der seinen Begeisterungszustand mit

eigener Krankheit nicht verbinden kann, sehr verschieden. Die Inspiration, die durch die gegebenen 24 Jahre wirksam sein wird, verspricht ihm der Teufel während des Gesprächs in Italien. Der Begriff Inspiration vertieft in diesem Roman weit mehr seinen Sinn. Dieser vertiefte Begriff erlöst den hilflosen Zustand der Kunst überhaupt, im besonderen der Musik der Gegenwart. Die Inspiration setzt nämlich der Kälte des Intellekts, der Adrian eigen ist, das schöpferische Feuer zu, das der gegenwärtigen Situation ganz fehlt.

Somit können wir den Unterschied zwischen Thomas Mann und Nietzsche erklären. Der Letztere ist „Einer, der die Wahrheit erst *schafft*, ein *weltregierender* Geist.“⁽²³⁾ Mit einem Wort ist er der Bahnbrecher. Dagegen ist der Erstere der einen Acker Bebauende. Hier in dieser Abhandlung haben wir es mit einigen Beispielen gezeigt.

少し細かな詮索めいたことから入って行こう。というのは、この物語の主人公アードリアン・レーヴァーキューンをめぐる二つの家、彼の生まれ故郷の家ブーヘル屋敷と、晩年に彼が住んだ第二の故郷であるプファイフェリングのシュヴァイゲシュティル家との対応関係がすぐ目につくのである。

.....彼の晩年の舞台は彼の幼年のそれの不思議な模倣であった。.....
そればかりか、家も、庭も、家族の構成も、精確にブーヘル屋敷に照応していたのである。⁽¹⁾

○レーヴァーキューン家(父ヨーナターン、母エルスベト、長兄ゲオルク他)
とシュヴァイゲシュティル家(マクス、エルゼ夫婦、長男ゲレオン他)

○ヴァイセンフェルスから迎えの馬車で45分のブーヘル屋敷とヴァルツフートから車でプファイフェリングへ。

○庭の真中に菩提樹 (Linde) —— 榆 (Ulme)

この菩提樹については、「いさきか邪魔だった。.... 家を継ぐ息子は、

(1) Thomas MANN, Gesammelte Werke, S.Fischer, c.1960, Bd.VI, S.39.
トーマス・マン全集、第6巻、P.29f.円子修平訳、1971。以下、DrF、およびファウストと略記

代々、若い頃には実利的な理由からこの樹を伐ってしまおうと主張して父親と争うが、のちには家長として自分の息子の要求を拒んで樹を護るのが常なのだそうである。」⁽²⁾

○ その他の対照

レーヴァーキューン家	シュヴァイゲシュティル家
○ Kuhmulde 牛の槽(池)	— Klammerweiher クラマー池
○ Zionsberg シオン山	— Rohmbühel ローム丘
○ Suso	— Kaschperl (飼犬)
○ Stall-Hanne	— Waltpurgis (厩舎女中)

上記のように几帳面にそれぞれ対応する一組を形成しつつ、両家の家族や環境が登場する。このような類似が事実としてあり得るだろうかと言えば、それはいかにも出来過ぎた作りものという感じを禁じ得ない。つまりこれはマンに特有の、虚構をいかにも真実らしく見せる仕掛けに違ひあるまい。そしてすでに発病したアードリアンは、故郷の実家の母が自分を迎えて来るのを聞いて、自らを恥じるかのように村の池 Klammerweiher に入水自殺を図る。運よく助けられるのだが、自分では故郷の池 Kuhmulde に入ったつもりでいる、そして「前にたびたび水浴びしたり泳いだりしたことのある池で溺れるのは難しいことだと呟」⁽³⁾ くのである。狂った男は両家の違いを完全に識別できない。こうした混同しやすい類似を事細かに設定したその目的は何か、それは狂人同様、読者をもごく自然に混乱させて、この両家の家族や環境の類似がアードリアンとニーチェとの類似あるいは同一性であるかのようにすり替えるためなのだと考えてはどうであろうか。このようにして、小説の最後のところで故郷の母親エリザベトが狂える息子を引取りに現われたとき、われわれは一瞬の間、アードリアンのもう一人の母親とも言うべきエルゼ・シュヴァイゲシュティル夫人から息子を引取りに来たのが、レーヴァーキューンの母なのか、あるいは、同様に病める息子を世話をしたと言われるニーチェの母フランツィスカなのか、ふ

(2) DrF., S.19,
ファウスト、P.15

(3) DrF., S.673
ファウスト、P.519

と意識があやふくなる。ニーチェを母親が引取りに来たのだろうと錯覚してもおかしくはないような気分にわれわれはなっている。巧妙なニーチェの登場の仕方ではある。類似がこの作品では重要な役割を果たす。

先の論文でわれわれは『非政治的人間の考察』を取り上げて、この作品は確かに小説ではなくて大規模な評論ではあるが、その至るところでニーチェの名が現われている頻度から考えて、内容としてはニーチェを主人公にしたある種の小説のようなものではないかと考えたのである。しかし形としてはあくまでも評論なのであって、ニーチェと名指しして発言されたものを客観的な考察の対象とし、これこれのマンの発言がニーチェの引用であるとか、ニーチェの影響だとかを論ずることができたのである。しかし今回のこの小説はニーチェの名は一度も出て来ない。だがその主人公アードリアン・レーヴァーキューンのモデルはと言えば、やはりニーチェである。別な言い方をすれば、この小説はマンが再び若い頃の芸術と生の問題に立ち帰った芸術家小説、——その意味では自伝小説であって主人公はマン自身かも知れないが、類似関係の深さから考えれば、B. Blume も言うように、何よりもこれはニーチェ小説 (Nietzsche-Roman)⁽⁴⁾ とするのが妥当なところであろう。『「ファウストゥス博士」の成立』⁽⁵⁾ でマンも次のように言う。

.....それで、このレーヴァーキューンの悲劇はニーチェの悲劇と編み合わされているのだが、慎重な注意を払ってニーチェの名を作中のどこにも出していないのは、ほかでもない、この快意状態（オイフォリー）におちいった音楽家レーヴァーキューンがニーチェの代わりになっているからで、したがつて、ニーチェはもはや出てくるわけにはいかないのである。.....⁽⁵⁾

確かに類似関係がいろいろ現われる。アードリアンはもちろん芸術家として、トマス・マン自身でもあるだろう。そしてアードリアンの親友ゼレーヌス・ツaitブルームは古典文献学者としてこれまたニーチェの分身であり、また

(4) Bernhard BLUME: Thomas Mann und Goethe, A. Francke, 1949, S.124.
Thomas MANN: Die Entstehung des Doktor Faustus, Gesammelte Werke, Bd.XI, S.166

トマス・マン：『ファウストゥス博士』の成立、全集第6巻、P.545

(5) Thomas MANN, Gesammelte Werke, Bd.XI, S.165
トマス・マン：『ファウストゥス博士』の成立、全集第6巻、P.544f.

語り手としては作者トーマス・マンの自身でもあるだろう。しかし最も深い類似関係にあるのが、アードリアンとニーチェとの関係である。いずれにせよ『考察』の場合とは異なって、いわばこれら的人物たちが相互の関係を維持しつつ小説の中に埋め込まれてしまっているので、『考察』の場合のように、一つ一つ取り出して吟味することができない。アードリアンを手にしたつもりで見ていると、魔術にかかったように何時の間にかそれがトーマス・マンに変身したり、ニーチェに変ったりしているのである。

こういう錯綜した関係にあって、最も興味ある、最も主眼とされている関係は今述べたように、アードリアンとニーチェの関係であろう。この関係についてはすでに様々な探索の結果が出されているのである。例えば G.Bergsten は要約的に明示している。

アードリアンもニーチェもプロテスタントの文化を刻まれた古風なドイツの小都市に育っている。両者とも異常な天賦の才を示し、大学に入る。師の後を追うために、両者は大学を変えてライプチヒに赴く。両者は全く同様な状況の下で Syphilis を自らに招き寄せる。それは集中的な創造活動の時期のあと、一般的麻痺と全体的な精神病へと移行する。両者はある友人の仲立ちで求婚するが失敗に終る。そして両者は病気の間、母親の世話を受ける。彼らは二人とも55才で8月25日に亡くなる。⁽⁶⁾

また上記の娼家での一件に関しては、ツアラトゥストラの第4部の終りにある、『砂漠の娘たちのもとで』で歌われた女たちはニーチェがケルンで体験したことであり、このエロティックな詩のモデルだとマンは考えるのであるが⁽⁷⁾、マンの小説ではそれがそのまま「砂漠の娘たち」として使われている。そしてその場面での両者の当惑とその場にあったピアノに救いを求めたという有名な話を両者は共有する。また両者の発病後、50才の誕生日に、花輪を持ってニーチェを訪問する Deussen と、同じく花を持ってアードリアンを見舞うタイトブ

(6) Gunilla BERGSTEN: Thomas Manns Doktor Faustus, Svenska Bokförlaget, 1963, S.71f.

(7) Thomas MANN: Nietzsches Philosophie im Lichte unserer Erfahrung, Gesammelte Werke, Bd.IX, S.679

トーマス・マン：われわれの経験から見たニーチェの哲学、三城満喜訳、P.532
G.BERGSTEN: ibd., S.75

ロームとの符合。あるいは細かなことだが、親友ツァイトブロームが入隊したのがナウムブルク第3野戦砲兵連隊であり、実際にニーチェが入隊したのが同じくナウムブルク第4野戦砲兵騎馬部隊第1中隊であったこと。あるいは小説の中で、アードリアンがツァイトブロームに出した手紙の末尾の署名に、Pero-tinus Magnus という12世紀の音楽家、ポリフォニー技法の大家の名を使うが、これはワーグナーがある手紙に用いた諧謔的な署名「高等宗教法院議員」(Oberkirchenrat) を思い出させる、というくだりがあるが⁽⁸⁾、これもニーチェの使った有名な署名、十字架にかけられた者、ディオニュソス、あるいは反キリストからの類推であろう。

さらには、上記にも述べられているのだが、アードリアンが年下の友人、かつアードリアンの禁色の相手シュヴェールトフェーガーを介しておこなったマー・ゴドーへの求婚はマリーによってあっさりと拒絶されるが、そもそもアードリアンの求婚の意図は自分の結婚ではなくて、マリーと結ばれるように仕向けられたのは、シュヴェールトフェーガーであった。そしてこれには悪魔との契約の裏をかこうとするアードリアンの深い考えがあったわけだ。つまり悪魔との契約で一切の愛を禁じられたアードリアンが、シュヴェールトフェーガーの愛の矛先をマリーに向けさせたのである。これが成功してマリーと結婚することになったことが、それまでシュヴェールトフェーガーと不倫の愛の関係にあったイーネス・インスティトリスが、嫉妬のあまり市内電車の中で男を射殺するという悲劇に発展する。他方でニーチェの場合にも仲介者による求婚というモティーフがあって、マンにヒントを与えたことは考え得ることである。すなわち、当時ローマの社交界に彗星の如く現われた美貌の才媛ルー・ザロメに魅惑されたニーチェは、友人のパウル・レーを介して求婚するが、これもアードリアンの場合のように軽く断られてしまう。しかしそく似た事情でありながら大きく違っているのは、ニーチェの場合は、男二人と女一人の奇妙な三位一体の関係をザロメが希望したということ以上に話は進展しなかったことである。物語の魔術師トマス・マンの手にかかるとマリーとイーネス、そして二人の男の愛の物語は、この世にあるまじき——というのも悪魔もこれに一翼を担っているからだが——すさまじい展開を見せるのである。現代に悪魔を出現させて、しかも荒唐無稽の馬鹿話に墮さない、この場合の悪魔とは人間の宿命ということであろうか。この小説で四人の男女が繰りひろげるドラマを、求婚

(8) DrF., S.494f.

ファウスト、P.378

という一つの愛のモティーフの現代的発展というように名付けたい。

このように、ニーチェの理念を現代的に発展させる、それはつまり必然的に複雑化し、敷衍するということになろうが、そこにわれわれはマンの功績を認めたいと思うのである。ニーチェは『この人を見よ』の中の、「ツアラトゥストラ」の項目のところで、この作品が出来上ったときの経験に即して、知的生産の原動力となるインスピレーションについて陶酔的に語っている。トーマス・マンはこの部分を「文章の点では傑作で、言葉の面からいって真の力作といえる。……」⁽⁹⁾ と絶賛しているのだが、それは次のように始まる、「——誰か、19世紀の今日に、昔の力強い時代の詩人たちがインスピレーションと呼んだものが何であったかを、はっきり会得している者がいるであろうか。誰もいないなら、私がそれを記述するとしよう。——...」⁽¹⁰⁾ という有名なところである。「... 人は聞くのであって、探し求めるのではない。受け取るのであって、誰が与えるのかを問い合わせしない。稻妻のように一つの思想が、必然の力を以て、躊躇いを知らぬ形でひらめく。——私はついに一度も選択をしたことがなかった。これはある恍惚の境地であって、…… これはまた幸福の潜む深所でもあって、…… 以上が私のインスピレーションの経験である。<私の経験もまたそうだ>と誰か私に向って言い得る人を見つけるには、数千年の昔に溯らなければならないことを、私は疑わない。——」⁽¹⁰⁾ あるいは、「——私の場合、創作力が最も豊かに湧き出るときには、筋肉の軽快さもまたつねに最高になった。身体が先に熱狂的感激に浸されてしまうのである。……」⁽¹¹⁾ というような調子で『ツアラトゥストラ』完成の状況が語られる。

ところでマンは先述したようにこのニーチェ晩年の作を称賛している一方で、醒めた目付きをも失ってはいない。つまり、ニーチェの「悟り、恍惚、昂揚、天来のささやき声、神的な力の自覚」を、「麻痺的な虚脱に、嘲弄するかのように先行する興奮状態を記述しているにすぎない。……」⁽¹²⁾ と指摘する。麻痺的

(9) Nietzsche's Philosophie, S.681f.

トーマス・マン、ニーチェの哲学、P.534

(10) Fr.NIETZSCHE: Ecce homo, Kritische Studienausgabe, Bd.6, S.339ff.

ニーチェ：この人を見よ、白水社全集、2－4、P.387ff. 西尾幹二訳

(11) Fr.NIETZSCHE: ibd., S.341

ニーチェ：同上書、P.390

(12) Nietzsche's Philosophie, S.682

トーマス・マン：ニーチェの哲学、P.534

B.BLUME: ibd., S.130

な虚脱という精神の病気、やがてニーチェを襲うことになる精神の病気とこのインスピレーションが固く結びついていることを指摘するのである。この冷静なマンの判断はまた小説中の悪魔のものもある。悪魔はイタリア滞在中のアードリアンの眼前に現われ、アードリアンと長い対話を繰り広げる。小説のはぼ真ん中あたり、XXV 番目の章がすべてこの対話に当てられる。そこではもちろん24年という時間、その間アードリアンは悪魔のインスピレーションに満たされて芸術作品を生み出すことになるのだが、その時間を買い取る契約が結ばれるわけで、この章はこの契約締結と悪魔のインスピレーションが中心に据えられているのである。そしてインスピレーションを生み出すのが病気であるという着想は小説の展開としては大変面白い。同様にそれはニーチェの精神の昂揚を狂気の前兆と見ることである。そしてアードリアンの友人の凡庸な画家シュペングラーのような人間では、病気になっても靈感の炎は燃えないのであり、ニーチェやアードリアンのような天才の場合にこそ初めて、病気は靈感の照明を生み出すのである。そこにこそ悪魔の登場する余地がある。もちろんニーチェの病気が何であったかは未だに明らかにされていないことであって、ニーチェも悪魔と結託したというのは詩的空想に属することであるが、ニーチェのツアラトウストラ発言を下敷きにして、『ファウストウス博士』という作品の世界がニーチェを包み込んで拡大されてゆくのである。『ファウストウス博士』の悪魔も先述のニーチェの言葉⁽¹⁰⁾と同じような言い方をする。

「....靈感(Impiration)とは何か、純粹な古い本来の靈感(Begeisterung)とは何か、批評、生氣のない思考、生命を殺す悟性の監督に少しも損われていない靈感(Begeisterung)、聖なる痙攣とは何か、今日なお誰が知ろう、古古典的時代においても誰が知っていたろう？....」⁽¹³⁾

ということになる。また悪魔のインスピレーションがあるとすれば神のインスピレーションもあるはずだ。悪魔の解説によればそれは、近代のベートーヴェンにおける樂想(Einfall)なのである。

「....ベートーヴェンの覚え書を見たまえ！ そこではどのテーマの樂想も神が与えたままになってはいない。彼はそれを作りかえ、『モット良ク』と書き加えるのだ。いつになっても決して熱狂的になることのないこの『モッ

(13) DrF., S.316

ファウスト、p.243

ト良ク』には、神が与えた靈感への信頼の薄さ、尊敬の薄さが現われている！真に幸福と恍惚とを与え、懷疑の余地なく信奉される靈感、選択、改善、修正のない、すべてが至福の口述として受けとられる靈感、歩みは止り、よろめき、崇高な戰慄がそれに襲われたものの頭のてっぺんから爪先に走り、眼から幸福の涙が溢れるような靈感、——それは、悟性にあまりに多く活動の場を残して置く神によってではなく、真に熱狂の人たる惡魔によってのみ可能なのだ」⁽¹⁴⁾

神の靈感に対して惡魔の売りつけようとする「古い本来の」靈感、「古代的な、原初的」⁽¹³⁾な靈感、それはワーグナーの『ニーベルングの指環』の素材となつた伝説の古さを思い出させる。先述したようにこの章は小説全体の要の位置にあって、作品の中で最も重要なモティーフを抱懐している。厳しい冷氣と共に現われてまず、アードリアンと duzen について論議し、また『カラマーゾフの兄弟』の惡魔のように自分の実在を強引に主張する。そしてすでに4年前に結ばれている契約、売られた24年の砂時計について確認する。さらにアードリアンの病気の進行、病気の説明、アードリアンがかかった医者の処理に話が及ぶ。転じて生と死、さらには芸術家の問題、現代における芸術の困難なありよう、特に今日の作曲家のむずかしさ、そして惡魔がアードリアンに与えるものと地獄について語る。その間惡魔は話題に従って3回その姿を変える。そしてこの章の中心部に位置するのが、惡魔のインスピレーションなのである。ニーチェの、インスピレーションを得たときの純粹な喜び、「——午前と午後のこのような二つの散歩道で、『ツアラトゥストラ』第1部の全体像が私の心に浮かんだのである。とりわけツアラトゥストラその人が、典型として私の心に浮かんだ。否、正しくは、ツアラトゥストラその人が私を襲ったのだ...」⁽¹⁵⁾もこのような稻妻の衝撃であったのだろう。しかしこのようない陶酔状態で終っているニーチェとは異なって、マンにおいてはこの靈感が起爆剤となって、この章で論じられたさまざまな問題、そして最後にはこの小説全体の命題である現代の芸術のありようという究極の問題へと発展してゆくのである。

現代芸術の直面している困難な状況、これがこの作品の主要テーマをなして

(14) DrF., S.316f.

ファウスト、p.243

(15) Fr.NIETZSCHE: Ecce homo, S.337

ニーチェ、この人を見よ、P.384

いることはすでに述べた。その困難な状況の克服のためには、アードリアンはやはりインスピレーションの力を借りなくてはならなかつたのは言うまでもないが、それがどのような形で実現されたか、というプロセスに関しては、アードリアンの叔父の楽器倉庫での冒険、クレッチュマルに師事する修業時代の頃から始まって、その後はいろいろな箇所でアードリアンの作曲の実際に即して詳細に語られる。特にXXII番目の章ではアードリアンが語り手ツァイトブロームに聞かせる音楽議論として「厳格作曲法」が説かれる。さらに悪魔との対話の中では最も詳しく音楽の状況とその克服が説かれるが、トーマス・マン特有の精密多彩な専門的知識が駆使されていて容易には理解できない。とにかく作曲が従来の叙情たっぷりとした、いたずらに冗長な歌であることはもはや通用しない。「過剰を厳禁し極り文句を否定し装飾を打ち碎く、緊密であれ、という苛酷な命令が、作品の生活形式である時間的な拡がりに反対する.....」。⁽¹⁶⁾アードリアンの最後の曲、カンタータ『ファウストゥス博士の嘆き』については殊の外詳細な説明が繰り返されていて、G.Bergsten も言うように、実際に音楽が聞こえて来るかのような感じがするのである。

.....すなわち、もはや一切の非テーマ的なものが消え失せ、基礎的な素材の配列が全体を覆い、その中では、もはやただの一つも自由な音符がないために、フーガの理念が無意味なものになってしまうような、窮屈的に厳格な形式を形成するものになったのである。.....

.....——他ならぬ形式の徹底性のために、音楽は言葉として解放されるからである。ある意味では、概略的、音素材的な意味では、仕事は作曲が始まる前に終ってしまい、作曲はなにものにも拘束されずに行われることが出来る、つまり、構成のかなた、もしくは、構成の完璧な厳格さの内部で再獲得された表現に身を委ねることが出来るのである。ファウストゥスの嘆きの作曲者は、あらかじめ組織された素材の中で、なにものにも妨げられずに、あらかじめ設定された構成を顧慮することなく、主觀性のままに振舞うことが出来る、こうしてこれは彼の最も厳格な作品、極端な計算の作品であると同時に、純粹に表現的なのである。.....⁽¹⁷⁾

要するに一方でシェーンベルクの12音音楽の理論の応用のような極めて厳格

(16) DrF., S.321

ファウスト、P.246

(17) DrF., S.646f.

ファウスト、P.499

な作曲技法、個人の恣意の介入を許さないような機械的な音構成、対するに他方で、これは多分悪魔のインスピレーションによるのであろう極めて豊かな表現、という二重性をなす音楽が推察されるのである。

あいつ、「..... 友よ、客観的なもの、いわゆる真理を求めて、主観的なものを、純粹な体験には価値がないと嫌惡の眼を向ける君の傾向はまことに小市民的で克服されねばならないものだよ。君は僕を見ている、したがって僕は君にとって実在するのだ。僕が本当に存在するかどうか、問題にする価値があるだろうか？ ある活動を行なっているものは実在するのではないだろうか、そして真理とは体験と感情ではないだろうか？ 君を高揚させるもの、君の力と権力と支配の感情を増大させるもの、ええい、そうとも、それが真理なのだ、——たとえそれが道徳の見地から見れば十倍も嘘だとしても。力を高揚させる性質の非真理はあらゆる不毛な道徳的真理に比肩すると僕は主張する。創造的な、天才を与える病気、高く馬上に打跨って障害を飛び越え、不敵な陶酔のうちに岩から岩へと疾駆する病気は、足をひきずりながら歩いて行く健康より、生にとって千倍も好ましいと僕は主張する。病気から病的なものしか生れ得ないという議論ほどの愚論を僕は聞いたことがない。生は気難しいものではない、道徳のことなど気にかけはしないのだ。生は病気の大膽な産物を摑みとり、貪り啖い、消化する、そしてそれをわがものとして血肉化するや否や、それは健康に化する。生の活動という事実の前では、君、病気と健康とのあらゆる区別は消滅してしまうのだ。受容力のある健康きわまる若人の一つの群れ一つの世代全体が、病める天才、病気によって天才になったものの作品に殺到し、それを讃美し、称讃し、賞揚し、それとともに生き、おのれの中でそれを変化させ、それを文化に遺贈する、文化は自分の家の窯で焼いたパンのみで生きるのではなく、少なからず、『使徒薬局』の贈物と毒とによって生きるのだ。.....」⁽¹⁸⁾

これは悪魔が今後アードリアンに与えるものを、自ら称揚しつつ数えあげているのだが、これはマンの声ではない。マンならば、生をこのように無条件に、熱狂的に称賛することはない。生を眺めるマンの眼はこのように直情的に迷いを知らぬものではなかった。生に寄せるトニオ・クレーゲルの愛には、「憧憬があり憂鬱な羨望があり、そしてごくわずかの軽侮と、それからあふれるばかりの貞潔な淨福」⁽¹⁹⁾ があるはずなのだ。これはまさしく、「悲劇の誕生」や「こ

(18) DrF., S.323f.

ファウスト、P.248f.

(19) Thomas MANN: Tonio Kröger, Gesammelte Werke, Bd.VIII, S.338

トーマス・マン、トニオ・クレーゲル、P.93、実吉捷郎訳（岩波文庫）

の人を見よ」におけるニーチェの口ぶりである。ここでは、真理とは静止せる、凝固せるものではなく、流動するもの、力の感情を増大させるものであることが先ず述べられ、病的なものも生は自らの中に取り込んで健康なものを生み出すこと、そして文化を築いてゆくことが叫ばれる。「病める天才、病気によって天才になったもの」とは明らかにニーチェを指すものと考えられる。その後も「君の狂気のおかげでもはや狂気になる必要がなくなった若人たちは君の名に絶対の服従を誓うだろう。」⁽²⁰⁾ という経過をたどり、果てはナチズムを暗示する「野蛮」へと連なってゆくことが悪魔によって示されている。マンはこういうニーチェの声に満足できないので、アードリアンではなく悪魔にこれを語らせるのである。生についてはニーチェの思想に深く影響されたマンではあるが、ニーチェの意見の間違いをマンはニーチェ講演で提示せざるをえない。以下のようにニーチェが生を弁護するのに対して、生を精神の手から守る⁽²¹⁾ というのでは反対ではないか、精神、知性、理性こそ本能的な力から守られねばならないものではないか、という反論を提出している。

..... 「神」という概念は生の反対概念として発明されたのだ。——「神」という概念の中では、ありとあらゆる有害なもの、有毒なもの、誹謗中傷の類、生に対する徹底せる敵意などがことごとく糾合されて、一つの凄まじい統一体を成している！ 「彼岸」とか「真の世界」とかいう概念は、現に存在しているこの唯一の世界を無価値であるとして——もはやわれわれのこの地上の現実のためにいかなる目標も、いかなる理性も、いかなる使命も今後ずっと残さないままにしてしまうために、発明されたのである！ 「靈魂」や「精神」といった概念、さらにそのうえ最後に「不死不滅の魂」といった概念は、身体を侮辱し、身体を病気に——「神聖に」——するために発明されたのである。.....⁽²²⁾

ニーチェの思想の誤解、あるいは意識的な悪用ということはすでにしばしば指摘されている。人類の未曾有の災厄であった大戦を生き延びたマンは、その誤謬を肌身に感じているわけである。マンの反論は、若いころから深く傾倒し

(20) DrF., S.324

ファウスト、P.249

(21) Thomas MANN: Nietzsche's Philosophie, Bd.IX, S.696
ニーチェの哲学、P.545

(22) Fr.NIETZSCHE, Ecc homo, ibid. S.373f.
ニーチェ：この人を見よ、P.434f.

てきた先人への批判なので、いわば身内の人間の批判であるだけに、真実に迫るものがあると思われる所以である。この例でもわかるように、ニーチェは「真理を最初に創造する人、世界を統治する精神、すなわち一つの運命である」⁽²³⁾と友人に言われるが、別の言い方をすれば、開拓者であったニーチェの仕事を後世の人であるマンは、吟味し、耕し、花開かせる人であると言えるのではなかろうか。

(23) Fr.NIETZSCHE, Ecce homo, ibd., S.343
ニーチェ：この人を見よ、P.392